

くら川と云戀をよめるによれば、二尊を祭に近し、又さくら山に多し、櫻川の名によれば、木花開耶姫なるべくや。

〔木曾路名所圖會五〕筑波山中禪寺

夫此山は原本名筑波と書す、いにしへ東海逆流して波たつ事多し、故に堤防を築てこれを避る。これによつて築波と書す後人訛りて筑波と名づく、二神登山し給ひて水波を鹿島の海に退け、こゝに鎮座し給ふ。○略男體女體の峯よりおつる一流の瀧のながれを美那濃川と號す、これ女男の神の靈泉たれば多く戀に詠じ、みたらしと名附、陰陽和合の流れなり、故に此山女人結界にあらず、坂東五番の靈山なり、特に東關官家の御歸依あれば、日々繁昌し、詣人道を遮る、こゝを東路の靈嶽、まだ敷島の道の御神と仰ぐも、恐れありとしられける、抑此筑波山は、漢土の五臺山の西南劈開けて、こゝに飛來したるといふ、故に山中に異草珍木多し、名を中禪寺といふ、江府の宿坊を護持院と號し、眞言宗にして、寺領貳千七百石、筑波の町長くして奇麗なる旅房多く、亦商家も多し、先は當國の名嶽にして、みな此御神の惠みなるべし、一鳥居傍端に句碑あり

雲はまうさすまづむらさきの筑波山

傍端に句碑あり

嵐雪

〔常陸風土記白壁郡〕古老曰、昔祖神尊巡行諸神之處、到駿河國福慈岳、卒遇日暮、請欲寓宿、此時福慈神答曰、新粟初嘗、家内諱忌今日之間、冀許不堪、於是祖神尊恨泣詈告曰、即汝親何不欲宿汝所居山、生涯之極、冬夏雪霜冷寒重襲、人民不登、飲食勿奠者、更登筑波岳、亦請容止、此時筑波神答曰、今夜雖新粟嘗、不敢不奉尊旨、爰設飲食敬拜祇承、於是祖神尊歡然謌曰、愛乎我胤巍哉神宮、天地並齊、日月共同、人民集賀、飲食富豐、代代無絕、日日彌榮、千秋萬歲、遊樂不窮者、是以福慈岳常雪、不得登臨、其筑波岳、往集歌舞飲喫、至于今不絕也。

夫筑波岳、高秀于雲、最頂西峯崢嶸、謂之雄神、不令登臨、但東峯四方磐石、昇降決屹、其側流泉、冬夏不